

アイラン・カン ー内なる本棚

The Bookshelf enLightened

2010年2月20日（土）－5月9日（日）



© Airan Kang :

Courtesy of Yumiko Chiba Associates

アイラン・カン（Airan Kang）は、叡智のあかりを光る本のオブジェであらわし、我々を観照の空間に誘います。

韓国で生まれ育ち、カントなどの西洋思想に慣れ親しんだ作家は、自らのアイデンティティーを模索するかのよう、1999年から本を用いた概念的なインスタレーションを発表してきました。作品は実際にある本のサイズと同じ原型を透明樹脂で型抜きし、LEDを使い内側から発光するように作られています。本の光に照らされるとき、光輝く本のオブジェは、個人の文化的蓄積をしめす記号でもあり、脳神経システムの一端子でもあるかのようです。

一冊の光る本から始まった作品は、近年では、物体としての本からその存在性を仮想空間に再構築し、見る人が身体を用いて体験できるプロジェクトへと提示し、デジタル時代における相互作用的な、新しい知のあり方を探っています。

日本における美術館スペースでの初の本格的な個展となる本展では、展示室のなかにミラールームを設け、虚構のまじる多角的な空間をつくりだします。

それは、仮想と現実が混在する、今日の情報化社会におけるリアリティーのすがたを映しているかのようです。

人間の物質の重力を超越して、高みにのぼる精神の瞬きをどうぞご覧ください。

■オープニングイベント アーティストトーク

対談ゲスト講師 岡部あおみ氏（武蔵野美術大学教授）

日時：2010年2月20日（土） 13:30-15:00

会場：ヴァンジ彫刻庭園美術館

岡部：カンさんの作品を見て感じたのは、まずモノとしての本がかつての重要性を失い、コンピューターを見ればある意味で自分が得たい知識が全てではないですがかなりの部分まで得られる時代になったことを意識させられたことでした。その電腦空間、いわゆるヴァーチャル・リアリティの空間の巨大さの中で、カンさんの作品の素晴らしいところは、そうした現実の中で作品自体がヴァーチャルとリアルと両方の間にある形で、さまざまな歴史的な問題、ひとつは本が携えてきた歴史、それと現在私たちが慣れ親しんでいる電腦空間の広がりのかかわりを非常にリアルに、しかも美しいフォルムとコンセプトで表現していることです。特に、カンさんのこれまでの十年間の創作の話で興味深く思ったのは、ある意味、時代の流れと逆行してポストモダンから出発されてモダンへと遡っていった点でした。またカンさんの作品のなかで、ヘテロトピアという言葉が出てきたのですが、会場の方々にミシェル・フーコーをよく知っている方とご存じない方がいると思うので、その辺をもう少し話していただければと思います。

カン：そうですね。ミシェル・フーコーという哲学者は、ユートピアとヘテロトピアについて話しているのですが、彼は最近コンピューターと関わりのある主要概念として浮かび上がった仮想と現実の問題を予見していると思われま。ここで、ミシェル・フーコーは鏡を使って説明していますが、現実と仮想のお互いに異なる空間を照らしあわせ仲介する役割を果たしている、というように鏡について述べています。鏡というものは、結局のところ、ひとつのユートピアでもあります。それというのは、「場所がない場所」であるからです。鏡においては、私は、私がいないところに、現実的には、表面の背後に開かれている非現実的な空間に、私を見ており、私がいないそこには、一種の影でしかないのだが、これこそが私自身の可能性を私に与え、私が不在であるところに、私を見ることを可能にする、まさに、鏡のユートピアである、というように、述べています。ミシェル・フーコーは、既に1967年に、この理想の空間にひとつの名前を与えています。それは、ヘテロトピアです。もちろんこの時代には、インターネットなどはなく、フーコーは日常生活から逸脱する空間をユートピアとヘテロトピアに分けて考えていました。ユートピアというのは、人の思考の中にしか存在しない、本当にはない場所です。これに対して、ヘテロトピアは実際の施設や制度のうちに存在しながら、人々を現実から運ぶ作用があるとして考えられています。人々は、図書館、映画館、博物館のような場所で、伝統的な時間との絶対的な断絶を感じるのです。ここで、異なる場所のヘテロトピアがわずかな時間だけ生まれ、そして消滅するのです。例えば船とかエレベーターとかは、場所があるのですが動くのです。例えば、電車に乗って東京から大阪に行きますと、電車というものは、動きますから、本当に、どこにいくのがはつきりしない、言い換えると、私たちが鏡の前に立っていると、私が見えるのですが、結局使うことはできなくて、また私が動くと、それも変わってきます。エレベーターも同じよう

な場所です。そのようなところを、ヘテロトピアというように、フォーコーが言いまして、私の作品にうつされる画面が、そのような空間ではないかと思いはじめまして、作品にとりいれました。

ミラーハウスについて

岡部：今回実現したミラーハウスは、中でゆっくり詩だけ聞くこともでき、素晴らしいと思います。さらに今回は中と外が断絶していたこれまでの作品とは違って、ハウスのマテリアルを半透明にしていますので、中と外の人が共有できるわけです。仮想と現実が混ざるといえるのか、行き来するような感じになり、境界感が薄れてくるというのも、ヘテロトピアの鏡を象徴しているような気がしました。原型として使われた本の表紙を複製したものをLEDの光る本の表紙にしているので、それが白くと美しく浮き立って見えるので、そうした表紙の色合いなども内容だけではなく、カンさんが選んでそうされているという気がしました。表紙・裏表紙・背表紙と三面ありますが、その中に仕込まれたLEDによって色が徐々に変わっていくのを見られるわけですが、変化の速度は一緒らしいのですが、その三面がそれぞれ違う色から出発しますので、三面に常に違う色が流れて見えるのが驚くほどに美しいと思います。かつては、色彩をこうした微妙なグラデーションで変化させるのは難しかったとお聞きしました。かつては何色が限度だったのですか？

カン：最初は十何色だったのですが、今は百色ぐらい。感じられないぐらいの色です。

岡部：我々が目で感じとり見ることができるのは、七色、虹色ぐらいまでですが、本当に繊細な色変化ですね。よく見ますと本当に色々な色の美しい変化を楽しめますね。

カン：結局LEDライトでないとそれが不可能なのです。ますます、発達していきますから、これからもっと増えると思います。それにしても、また、最近になって（色が）強くなっているのですね。（本に貼ってあるフィルムの）絵を取るときに経験したのですが、何も貼らないともっときれいです。それに表紙を作って貼ると、鮮やかさが落ちるので、文字の色を白にすると、そこだけが、非常にきれいに出来ますので、それを使います。作家として、コンセプトが一番大事です。どんな材料を使って、テクノロジーを使って作るのも大事なのですが、コンセプトだけだとコンセプトのアーティストになります、描くのが上手なら、描画する作品になります。それをバランス良くしながら、また、それから、あるときには、私が作ったコンセプトにテクノロジーがついて行けていないということがあります。それが悩みのひとつです。例えば故障したり、私はこうしたいのに、ここまでしかできないとか、そのようなことを感じる時が、一番、まあ、挫折のように思います。

岡部：最新のメディアやヴァーチャル・リアリティーで作品を作っている人たちはよく、いろいろやりたいことがあっても具体的になかなか技術が追いつかないと話されているのですが、カンさんの作品も、これからテクノロジーが追いついてくれば、もっともっと別の方向に行く可能性もあるわけですね、楽しみです。越後妻有アートトリエンナーレで常設展示されていた田中文庫で大がかりなインスタレーション作品を見せていただいたときに、中が暗かったのも、ある種、闇のなかで見るネオンのような明るさだと感じたのですが、今回は展示室全体が比較的明る

いにかかわらず、光る本はみな非常に色が鮮やかできれいに見えたのは、使われたアクリルなどの種類が違うからでしょうか？

カン：中のアクリルは、最初は樹脂で形を作って、前風呂敷の作品のときの立体を作る方法を使っていました。ですが、どうしても耳などといった角が駄目になってしまったことがあるのです。それである時期プラスチックを成形して作ったこともありましたが、最近になってまた戻ったのです。透明感があってきれいな方にしようとして頑張っているのですが、LED も最近いいものが出始めてそれに変えています。そうしたら色が本当に美しくなったのです。

■関連ワークショップ

カンさんといっしょに“私の一冊”を作って展示しよう

日時：2010年3月27日（土） 13：00～16：00

会場：ヴァンジ彫刻庭園美術館

対象：小学3年生～中学生

定員：15名

持ち物：自分のお気に入りの本一冊（忘れずに！）